

学徒兵の戦争体験

5月18日、私は台北市内でのアルバイトを定時の18時に切り上げ、一人のおじいさんが住むマンションの一室を訪ねた。その人は日本語世代のおじいさんで、今年92歳を迎える楊應吟さんである。楊さんは昨年、旧宅で転倒してしまい脊椎を損傷。病院での治療を経て、一ヶ月前から現在のマンションでの生活を始めた。今回、私が楊さんを訪ねた目的は、18歳の時に学徒兵として召集された楊さんの戦争体験をうかがうためである。

楊さんは1926（大正15）年、台南で生まれ、「国語常用家庭」で育った。国語常用家庭とは、当時、日本統治下にあった台湾や朝鮮において、学校や役所などの公的機関にとどまらず、一般家庭でも日本語を使用することを奨励した認定制度で、楊さんの実家の戸口にも認定証が掲げられていた。認定されると、米の配給が日本人と同じであったり、進学や就職で有利になったりと「純日本人」であることが何かと便利であったという。

楊さんは国語常用家庭ではあったが、日本人子弟の通う「小学校」ではなく、台湾人子弟を対象とした「公学校」に入学している。その理由は、父親の台北工業学校時代の友人が、たとえ国語常用

家庭であっても日本人と台湾人で差別は依然あり、弱かったら苛められるかもしれないとアドバイスし、それを父親が考慮の末、聞き入れたからであった。勉強嫌いだった楊さんは友人と遊んでばかりいる少年だった。大人数で自転車に乗ったり、今でも台南グルメが集まっている場所として知られる「サカリバ」へ行って粽や担仔麵を食べたりしていた。

楊さんは公学校卒業後、2年ダブって進学している。しかし、その進学先では喧嘩、苛め、制裁などが横行し、ここにいたら人間として墮落してしまうと感じた。そこで、「蟻地獄から抜け出さなければ」という決意で猛勉強を始め、当時、新しく高雄に設立された州立高雄工業学校を受験し、見事、3,000名の受験者のうちの200名に入って合格した。

そして、1945（昭和20）年4月、高雄工業学校3年生の時に、召集令状を受け取り、学徒兵として入隊した。私は学徒兵として召集された時の気持ちをうかがった。すると楊さんは迷わず「台湾は日本国であり、一国民として台湾を守らなければならない」と、当然のこととして受け入れたと語ってくれた。

楊さんは高雄工業学校の第三中隊第三部隊に所属した。部隊では、M4戦車の台湾上陸を想定し、それを食い止めることを目的とした訓練に励んだ。当時の作戦は、「蝟壺」と呼ぶ穴を掘り、戦車が来るのを待ち構えて戦車の腹をめがけて10キロの爆弾を投げること、三式手投げ爆雷という円錐形の3キロの爆弾を戦車のラジエーターをめがけて投げること、刺突爆雷という竹に爆弾をつけたもので戦車のキャタピラとキャタピラの間を突くことを想定していた。楊さんは「今から思えば、15歳、16歳くらいの少年が3キロの爆弾を投げられるわけがないし、蝟壺から出て爆弾を投げたら逃げ切れず確実に死ぬ」と作戦の実態を振り返った。楊さんから少年たちは「特攻訓練」をしていたのである。

当時、この作戦に対して疑問を抱かなかったのか聞いてみた。楊さんは当時、作戦の模擬演習を見た友人から「この作戦で生き残るのは無理だ」と聞いており、楊さん自身もそう思っていたという。しかし「上官の命令は朕の命令」であり、訓練に汗を流すほかなかった。

日本の敗戦が目前に迫っていた頃、高雄では米軍機のB-29によって、日本の戦況悪化を記したビラが頻繁に撒かれるようになった。楊さん自身も見かけてはいるが、ビラは宣伝工作と考え、すべて嘘っぱちであるとして決して信じなかった。そして、仮に本当だとしても「見ても役に立たない」と考えていた。

8月15日、楊さんの部隊には電気もラジオもなく、玉音放送は聴いてい

ない。放送の翌日あたりに部隊の連絡兵がやってきて、敗戦を伝えた。その知らせを聞いた楊さんは日本の敗戦を「信じられなかった」。その一方で、戦争が終わって命拾いしたという「喜び」と日本統治下で勉強してきたことがダメになるかもしれないという「不安」が混在していたという。

戦後しばらくして、楊さんは発起人の一人として、高雄工業学校卒業生と教員に呼びかけて、学校の思い出の文章を集めて回顧録を作成した。日本人からも台湾人からもたくさんの文章が集まった。学生時代には喧嘩もたくさんしたが、最後には結束して、強い絆がある高雄工業学校の人々。誇らしげに語る楊さんの表情と言葉からかつての学び舎への大きな愛が伝わってきた。



自著を手にする楊應吟さん